篁物語の寫本に關する研究

楠田　靖

（一）

小野篁集と篁物語は、四百四十二の字句の相違はあるが、内容は殆ど同じである。したがつて、小野篁集を図書寮本、篁物語を彰考館本、とよび、両本を含めて云う場合に篁物語とよぶことにする。篁物語の現存する写本は、図書寮本と、彰考館本の二本だけである。この二本の校合を試み、その性質を明らかにしたい。

彰考館本と図書寮本は同系統かどうか。

相違のある箇所では二本のうちどちらがよく意味が通るか。

河海抄や玉葉集に引用されている文や歌はどちらの本から引用されたものか。

について考察してみよう。

二、仮名遣　四五

「お」を「を」に誤つたもの　三

さきたちをくれて　おかしきさま

あやしうをとつれぬ　おのこ

をのがさ（図た）ま〳〵　おさなき

なきおりて

おしみ（図め）とゝめゝ

「を」を「お」に誤つたもの　二一

くちおしく

おとこ　一四　おさむること

「ほ」を「を」に誤つたもの　五

いとをし

なを　二

すなを

とをき

「ほ」を「お」に誤つたもの　一

いとおしうて

（二）

彰考館本と図書寮本の間には二百二の一致する箇所があり、両本を同系統とみることも可能である。

宮田和一郎氏も国語国文（昭和九年八月）に、「篁日記の研究には正確厳密なる校訂を要するが、此の場合に於てはそれは全く絶望である。何となれば、以上三本は系統が同一のものであるから、これに依つて充分なる校訂の目的は達せられない。」として、両本が同系統であるとみていられる。

校合した結果両本が一致するものは次の通りである。

一、漢字　一五七

人　三九、中　四、三四日一、女　一一、君　七、七日　三、河一、大君　一、三七日　一、山　一、又　一、日　一、程　二、願一、三年　一、月　三、一人　一、二三　一、月夜　一、二人二、廿　一、夜　五、三人　一、給　一五、春　一、三四人　二道中　一、冬　一、一尺　一、兵衛　一、申　一、昨日　二、右大臣　一、神　一、時　一、雲　一、車　一、思　一、物　一御車　一、心　四、所　二、御　一四、夢　一、身　四、御返二、花　一、涙　二、返事　一、家　一、火　一

「わ」を「は」に誤つたもの　うちにまいり給　ものゆへ
なきさはけは　ためらひてまいらん　「たう」を「とう」に誤つたもの　一
あは　を（図お）いけれは　とうめ
「い」を「ゐ」に誤つたもの　一　「ひ」を「い」に誤つたもの　一　「やう」を「よう」に誤つたもの　一
家にゐにけり　「ひ」を「ゐ」に誤つたもの　二　かよう
「ゐ」を「い」に誤つたもの　五　たま（図玉）しゐ
いなりにまいりけり　たましゐ　三、誤字　一
まいらむ　「ゑ」を「へ」に誤つたもの　二　ときあけてみれは
え（図ゑ）まいりこす　すへたてまつらん
西、脱字　一　4、重点の書き方の相違　一
なきなかすなみたのうへにありしにもさらぬ……あはの（図ぬ）　5、単なる送り字の有無による相違　五
山（図う）かへる　6、「む」と「ん」の表記による相違　二一
図書寮本と彰考館本の間には右の様な一致がみられる。特に仮名遣　7、仮名遣の正誤による相違　五二
で「かやう」を「かよう」としているのは、他の二例は両本が一致し　8、漢字の正誤による相違　七
て「かやう」としていて、此処だけが「かよう」にしているものであ　9、類似字体から出たと思われる相違　四四
る。　10、欠字衍字の有無による相違　六九
右の様な事から、彰考館本と図書寮本が同系統であると考える事も　11、その他の相違　二八
可能である。
しかし、多数の写本を校合して得た一致ではなく、たゞ二本を校合
して一致したものであるから、同系統と断言することは出来ない。
図書寮本と彰考館本の間には、二〇二の一致よりもはるかに多い四
四二の相違がある。その相違を類別すると次のようになる。
1、漢字書と仮名書に依る相違　一九一
2、音便に依る相違　一五
3、重点と文字に依る相違　九

1乃至6までは本文の内容に直接関係のないものである。7以下は概して本文の意味を考える上に正否を伴う相違である。「意味の通りやすい本を正しい本文としてはならない。」と池田亀鑑氏が「古典の批判的処置に関する研究」で述べていられるが、原文に誤謬のないかぎり本文は意味の通りやすいのが普通であると考えられるので、彰考館本と図書寮本のどちらに従つた方が意味の通りがよいかみてみよう。

但し仮名遣については歴史的仮名遣いに従つてみると右の様な数字

が出るのであるが、たつた二つの写本では篁物語の本文を再建出来ないので、篁物語としての仮名遣も定めがたく、したがつて、正誤をきめる事は出来ない。

なお漢字の正誤についても、当時のものに「原則としてあて字を用いなかつた」と言う確証をみないので、正誤を決めることは差控える。9の類似字体から出た相違は、一本はAと書き一本はBと書いている場合、AとBによく似た字体があると、元来はAかBかであつたものが、転写を重ねるうちに類似字体に写し誤つて二様に伝えるようになつたと考えられるものである。

類似字体から出たと思われる相違は四四あるが、その中の重なものを次にあげる。

(1)（図、哥・一首をなんかきたりける
　（彰、

(2)（図、ろ
　（彰、おとこきて

(3)（図、い
　（彰、おとこは

(4)（図、も
　（彰、かしは車

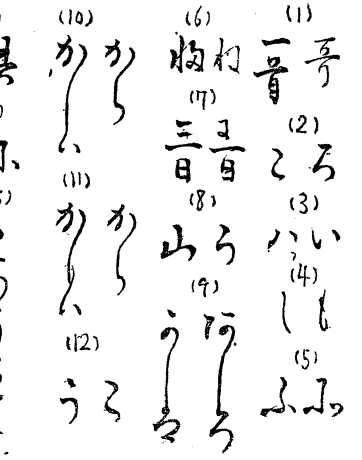
(5)（図、も
　（彰、かしは車

(6)（図、ね
　（彰、いとわかくていたりたへき人もなく

(7)（図、に一
　（彰、よろこひたまふ・三日の夜

(8)（図、く
　（彰、山たつ・ることもえたりかほに

（類似字体は、図版参照）



右に図書寮本の字体を左に彰考館本の字体を記した。

右の中、(1)と(2)はどちらの本に従つても意味が通る。(5)と(8)は図書寮本の方がよく意味が通る。(3)と(7)は彰考館本の方がよく意味が通る。(4)と(6)はどちらの本に従つても意味が不可解である。

図書寮本又は彰考館本に従う理由を簡単にのべる。

(5)が図書寮本に従つた方がよい理由は、彰考館本のように「ふみ」であるならば、「つく」とあとの方が終止形でなければならない。しかし「つくる」と連体型になつているので、「ふ」よりも係の助詞「ぞ」の方がよい。

(8)が図書寮本に従つた方がよいのは、彰考館本のように「山たつる」では全く意味がわからないこと、小野篁の歌は古今集に六首みえるほどであるから、篁のことを図書寮本のように「うたつくることもえたりがほに」と書かれていても不思議ではないこと、この文のすぐ後に「このこまことにてかくうたよまぬはなかりけり」と解される部分があつて、「うた」とした方が前後のつゞき具合に無理がないなどの理由からである。

(3)が彰考館本にしたがつた方がよいのは、万葉集には格助詞「い」を用いた例が三例あるが、平安時代のものには見当らないからである。

(7)は彰考館本に従つた方がよい。平安時代には、結婚三日目に「ところあらはし」の風習があつたところから、「三日の夜」であると考えられる。「みかの夜」の用例は後拾遺集にみられる。「一日の夜」の用例は見当らない。国語辞典によると、江次第、執壻に「今の所顕一夜也」とあるので、「一日の夜」でもよいが、文全体をみると、「いとかしこきことなりとよろこひたまふに一日の夜いかめしうしてまち給ふ」と「に」があることが不自然である。したがつて彰考館本のように、「よろこひたまふ」で一応きつて、「三日の夜いかめしうしてまち給ふ」とした方がよい。

このようにして類似字体から出たと思われる相違では、

どちらの本に従つても意味が通るもの　一七

図書寮本に従つた方が意味が通るもの　一一

彰考館本に従つた方が意味が通るもの　一三

どちらに従つても意味が通らないもの　三

で、意味の通りは両本殆ど同じで優劣はつけられない。

10の衍字と欠字による相違は六九あるが、次の七例はその重なものである。

①〔図、ふみのてちり
　彰〕

②〔図、二人はおなしいろを
　彰〕

③〔図、のせたてまつりて
　彰〕

④〔図、ま・てきにしかは
　彰〕

⑤〔図、いとをしと・・みてをし
　彰〕

⑥〔図、くひつ・きやへに
　彰〕

⑦〔たましゐなんよな〳〵きてかたらひける
　彰〕

右の中で④⑤はどちらの本に従つても意味が通る。③と⑥は図書寮本に従つた方がよい。

②と⑦は彰考館本に従つた方が意味が通る。

①はどちらに従つても意味が通らない。

図書寮本又は彰考館本に従つた理由を簡単にのべる。

③が図書寮本に従つた方がよいのは、「のせたてまつりて」と言うのは彰考館本のおよそ一行にあたいする字数であるから、書き写す場合に不注意で一行とばしてしまつたのではないかと考えられるからである。又「つくりてのせたてまつりて」と「りて」と言う言葉がつゞけて用いられているので「つくりて」の「りて」を書いた後「たてまつりて」の「りて」から先を書いてしまつたとも考えられる。

⑥が図書寮本に従つた方がよいのは、「くひつきやに」では全然解釈出来ないからである。

②が彰考館本に従つた方がよい理由は、「いろ」がなくても意味は通るが、図書寮本では一行十五字以上になつているのが普通なのに、此処だけが十三字になつているので、図書寮本は脱字であろうと考えられるからである。

⑦が彰考館本に従つた方がよいのは、後の方が「かたらひける」と連体形になつているので、係助詞「なん」はあつた方がよいからである。

このようにして衍字又は欠字による相違では、

両本どちらに従つても意味が通るもの　三三
図書寮本に従つた方が意味が通るもの　一九
彰考館本に従つた方が意味が通るもの　一六
どちらに従つても意味の通らないもの　一

で、意味の通りは両本同じ程度である。

11のその他の相違は今までにあげた相違以外のものである。二十八例あるが次の四例はその中の重なものである。

①（彰）図、おもふもあかし（おもひ）
②（彰）図、かしらつきいときよけにて（なり）
③（彰）図、給しかは（へ）
④（彰）図、このこんまうのゝこて（むこら）

右の中で②は両本どちらに従つてもよい。

①は図書寮本に従つた方がよい。③は彰考館本に従つた方がよく、④はどちらに従つても意味がわからない。

図書寮本又は彰考館本に従う理由を簡単にのべる。

①が図書寮本に従つた方がよいのは、「おもふあく」と言う言葉はないので、「おもひあく」に強意の助詞「も」が入つたものと考えられるからである。「あとはかなし」に「も」を入れて「あとはかもなし」としたような類と思われる。

③が彰考館本に従つた方がよいのは、過去の助動詞「し」は用言の連用形につくので、「給へし」よりも「給し」の方がよいからである。「給」を「たまふ」と読んでいる例は算物語中に多いので、「給し」を「たまひし」と読んでも差支えないと思う。

この様にして、その他の相違では

どちらの本に従つても意味の通るもの　九
図書寮本に従つた方が意味の通るもの　六
彰考館本に従つたが方が意味の通るもの　一一
どちらに従つても意味の通らないもの　二

で、彰考館本の方がやゝ意味の通りがよい。

以上の今までにのべた結果をまとめると、

図書寮本に従つた方が意味が通るもの　三六
彰考館本に従つた方が意味が通るもの　四〇

である。従つて、図書寮本と彰考館本を比較して、どちらが意味がよく通る本だとは言えない。

両本どちらに従つても意味のわからないものは、転写するうちに類似字体に書き誤つて、不可解な語になつたと考えられ、類似字体をたどつて、元来用いられていたと思われる言葉を推測出来る。二例について考察を加えよう。

かしは車（図かもは車）

宮田和一郎氏は国語国文（昭和九年八月）に「あじろ車」の誤であろうとしていられる。理由は図版(9)のように「あしろ」と「かしは」は誤りやすい事、「あしろ車」は佐以上の常用であることなどをあげていられる。これに対して、「かしは」は「から」の誤ではないかと思う。それは図版(10)に示したように「から」の「ら」が「しは」に誤つたとみる方が「あしろ」が「かしは」に誤つたとみるより無理がないこと、図版(11)のように図書寮本の「かもは」も「から」の「ら」が「もは」に誤りやすいと思れること、「から車」の用例は、栄華物語にもあり、国語辞典に依ると、「太上天皇、皇后、東宮、准后、親王又は摂関などの晴れの時の乗用」とあつて、「女の身には大王、みかとには誰をかを」と言う物語の文によくマッチするなどの理由から、「あしろ車」の誤というよりも「から車」の誤であろうと考えられる。

このこんまうのゝこて（図、このこむこらのゝこて）

宮田和一郎氏は国語国文（昭和九年八月）に「このこむまこ共にて」の誤であろうとしていられる。これは図版(12)(13)(14)に示すように、「こ」が「う」に、「共」が「のゝ」に、「に」が「こ」に変つたと考えられないだろうかとしていられる。これに対して、「このこむまこのうちて」の誤ではないかと思い、図版(15)(16)のように類似字体をたどつてみた。

その結果、彰考館本の「このこんまうのゝこて」にも、図書寮本の「このこむこらのゝこて」にも誤る経路を考えることが出来た。しかし、「うちで」という用法を平安時代のものに見出せないので、宮田氏の説に従う外はない。宮田氏の説は、彰考館本に就いてだけの事であるから、図書寮本について考察すると、図版(17)の様に「このこむこ共にて」から「このこむこらのゝこて」に誤ることも考えられる。「ま」が「こ」に、「こ」が「ら」に変つたと考えられ、あとは彰考館本の場合と同じである。

（三）

河海抄や玉葉集に引用されている文や歌は、彰考館本と一致する。

河海抄槿巻に引用されている「しはすのもちころ月いとあかきに物語しける人をみてあなすさましはすの月夜ともあるかな」というところを篁物語の二本と比べると、

河海抄、しはすの月夜ともあるかな・

図書寮本、　　ん

彰考館本　　・

となつて、彰考館本と一致する。

又「比叡の三昧堂にて七日のわさしけり」のところを比べると、

河海抄、三昧堂にて七日のわさしけり

図書寮本・・・・・・

彰考館本三昧堂にて

となつていて、此処でも河海抄の引用文は彰考館本と一致する。

後藤丹治氏は、国語と国文学（四巻一二号）に、図書寮本と河海抄に引用されている文との関係を、「河海抄が小野篁集と同書なることは充分断定される。仔細に比較して二、三字句の小異はあるが、此の種に写本に共通の性質であるから、深く咎めるに足りない。ひえの七日のわざしけりでもひえの三昧堂にて七日のわざしけりでも意味は通じる。」としていられるが、河海抄の篁物語の引用文と、彰考館本とは全く一致するのであるから、河海抄と図書寮本が同書であるとするのは誤である。宮田氏は、「王朝三日記新釈」の中に同じ例をあげて河海抄に篁物語の引用文のあることを示していられるが、どちらの本と一致するものであるかと言うことは述べていられない。

玉葉集に依拠されている歌と篁物語の歌とをくらべてみよう。

玉、いもせやまかけたにみえてやみぬへく
図、　　し
彰、　　く
玉、人しれぬこゝろたゝすのかみならは
図、　す
彰、　ぬ
玉、けぬへきみをもおしみとゝめゝ
図、　め
彰、　み

このように、玉葉集に依拠されている篁物語の歌も彰考館本と一致する。

（四）

図書寮本、彰考館本の性質を明らかにするために、三つの問題について比較考寮した。

その結果、次のような結論に達した。彰考館本と図書寮本は同系統だと言う事も可能である。

両本の相違箇所を、本文の意味の通りと言う点からみると、図書寮本、彰考館本に優劣はつけられない。

どちらの本に従つても意味の通らないものについては、類似字体をたどつて元来用いられていたと思う言葉を推測することが出来る。

河海抄に引用されている篁物語の文や、玉葉集に依拠されている篁物語の歌は、彰考館本の文や歌と一致する。

（三九頁より）

りのある生活がほしいとつく〴〵うらやましくさえ感じるわけでございます。最上学年の担任で卒業を前にして何だか雑務に追われつぱなしで勉強がほとんど出来ないということが残念でたまりません。（一月十日　第四回卒業生　原田順子）

国文研究誌有難うございました私の様に家にばかり居りますととかく学問とは縁遠くなり勝ちですが、皆様方の論文を拝見していると大いに啓発された様な気が致します。又卒業生の方々や在学中の皆様の御動向も大変懐しく存じました。何卒先生方の良き御指導の下に益々御発展なさいます様お願い申し上げます。（一月十一日　第三回卒業生　楠田　克）

何もわからないままに小学校の教壇に立つてはや二年になろうとしています。一年目は川内小学校の二年生で、一番あばれん坊が揃つている組を受け持ちましたので、学級の児童管理にとても苦労しました。十人ぐらいけんかをしたりあばれたりする男子がいたので授業も思うように出来ませんでした。気苦労から食慾がなくなり骨と皮にやせてしまいました。それで学校側でも心配して下さつて、例の十人の男の子を他の学級にまわして下さいましたので、それからはずい分し易くなりました。四月には幸いに地元の串木野小学校に転任させて戴きましたので、徒歩で通勤できるようになりまた四年生でいい子ばかりの担任でしたので、非常に気持よく仕事ができるようになつて、健康もめき〴〵快復いたしました。私は体育が大きらいなのですが子供は大すきですので、少々の雨ではなか〴〵やめるわけにゆきません。小学校の先生としての教育を受けていない私にはいろ〴〵辛いことも多いのですが、なついてくれる子供たちはかあいく、小学校の先生になつてよかつたとしみ〴〵思つています。（一月十一日　第三回卒業生　植村映子）